個人と国家・民族を考える授業実践

イ・ウンホン実践「壬辰倭乱を味わった沙也加の人生」に私が学んだこと・考えたこと

里井　洋一

2004年3月24日、テグ（大邱）市サンイン（上仁）初等学校で、イ・ウンホン先生の授業「壬辰倭乱を味わった沙也加の人生」を、子どもたちとともに受けることができました。イ・ウンホン先生ならびこの授業を設定していただいた韓国「全国歴史教師の会」をはじめとする「第3次日韓歴史教育者交流会」を準備された方々に感謝いたします。

このイ・ウンホン先生の授業で学んだこと・考えたことを授業の流れにそって以下述べて行きたいと思います。授業記録の翻訳は林桂花さん[1]にお願いしました。

祖先を問う

教師：　このクラスにキム（金）という名字の学生は何人いますか？手を挙げてください。（何人かの児童が手を挙げる）

教師：　何のキムなのか、言ってみてください。はい、Aさん。

Aさん：私の祖先はキムソンピョンで、安東キムです。

教師：　はい、Bさん。

Bさん：私は金海キムで、祖先はキムスロ王です。キムスロ（金首露）王[2]は伽耶を建国した方です。

教師：　今のは金海キム。では、金海キムの名字を持っている学生は立ってみてください。（五人立つ）祖先は誰ですか？

児童1：キムスロ王です。

児童2：キムスロ王みたいです。

児童3：私もキムスロ王みたいです。

児童4：キムスロ王です。

私のルーツは大阪泉佐野・湊の里井です。幕末、肥料問屋として栄え、個人寺を建立したという歴史を知ったのは沖縄に来て自分のIdentityを考えざるを得なくなった大学時代のことです。韓国・朝鮮では同姓同本の者同士は結婚できない[3]というほど帰属する氏族は大切であることは知っていましたが、

---

[1] 2001年10月、琉球大学大学院に在学しておられた中国朝鮮族出身の林桂花さんとともに、台湾の教科書を学ぶことになり、あくる年は台湾・中国・韓国の歴史教科書を学んだ。2003年3月には彼女の案内で中国朝鮮族が住む中国東北地方を巡見した。その記録は『歴史と実践24号』にある。

[2] 洛東江河口近くを金海という。金海から上流の大邱にかけての洛東江沿いには古代部族国家である伽耶国があったという。金海付近には金首露王が金の卵の形で降臨したという亀旨峯やその王陵、王后陵がある。

[3] 韓国では同姓で、祖先の出身地を示す本貫も同じ（同姓同本）であれば民法には同姓同本不婚規定があったために（809条）結婚できなかった。しかし、2000年民法改正が改正され、父方または母方の8寸（高祖から高孫にいたる親族）以内のみ結婚できないようになったといいます。

韓国の小学生までが自分が属す氏族を自覚しているということを学ぶことができました。

賜姓金海金氏

教師：　金海キム氏に、キムスロ王の後裔はいますが、同じ金海キムではあるが、ファソン金海キム氏ー金忠善の後裔はいないでしょうか？（間を置く）いないですね。

教師：さて、ファソン金海キム氏というのは、祖先が金忠善で、ファソンというのは、王様から名字を授かるということです。金忠善の後裔は今もここから車で40分ぐらい離れている友鹿洞という村に住んでいます。大体 200 人ぐらいですが。では、ちょっと聞いてみましょう。ファソン金海キム氏の祖先金忠善は、ほかにも名前を持っていますが、その名が何なのか分かりますか？（無答）その名は沙也加ですーどこの人でしょう？

児童一同：日本。

教師：　はい、日本人です。では、ここでちょっと考えて見ましょう。皆さんの祖先は韓国人なのに、ファソン金海キム氏金忠善の後裔は日本人を祖先として持っています。なぜそうなのか、考えてから発表してください。（時間を置く）はい、C さん。

C：彼は壬辰倭乱の時、日本からわが国に帰化した人みたいです。

教師：　はい、D さん。

D：壬辰倭乱の時、大きな功績を立てて、韓国人に認定された人みたいです。

ファソンとは賜姓、すなわちこの場合金海キムという姓を朝鮮王から賜ったということになると考えるのが一般的だと思われます。子どもたちの中に何人かの金海キム氏がいました。金海キム氏は韓国・朝鮮最大の氏族集団だといいます。金忠善はその最大の氏族集団への参加を許されたと見ることはできないのでしょうか。金海キムといわず、賜姓金海キムを強調するようになったのは、後生のことではないでしょうか。

子どもたちの中には、ファソン金海キム氏の子孫はいませんでした。

しかし、子どもたちはファソン金海キム氏の始祖金忠善が帰化日本人沙也加であることは知っていました。その理由をイ・ウンホン先生は、授業の後、沙也加について３時間事前学習したからだと話してくれました。

壬辰倭乱と百姓

教師：　では、金忠善について調べてみましょう。

（ビデオ放映）

教師：　沙也加について理解できたでしょうか？1592 年、わが国ではどんな出来事が起こりましたか？

児童一同：壬辰倭乱。

教師：　壬辰倭乱はどんな戦争でしたか？

児童：・日本がわが国に攻めてきた戦争でした。

児童：私たちは刀と槍で、日本人は鳥銃[4]で戦いました。

教師：　そう。1592 年、日本は鳥銃で、韓国は盾と槍で戦いました。当時、日本が韓国に攻めてきたわけですが、百姓はどのように考えていたのでしょう？

（間をおく）

はい、E さん。

E：日本の百姓たちは、鳥銃があるから勝てるだろうと思っていたでしょうし、韓国の百姓は、槍と盾しかないから恐らく負けるだろうと思っていたでしょう。

教師：　壬辰倭乱という戦争については、どのように考えていたのでしょう？はい C さん。

C：韓国と日本との戦争は、良くないし、無謀なものだと考えたでしょう。

教師：　理由は？

C：なぜなら、戦争は両国の百姓に共に被害を

4 火縄銃

もたらすからです。

教師：　はい、Fさん。

F：日本と韓国が和平交渉し、お互いに手を取って、発展してほしかったでしょう

教師：　理由は？

F：戦争となったら、両国が共に被害を受けるし、また銃や刀など武器の製造で、多量の金属材料を費やすことになるからです。

教師：　あと一人…。　はい、どうぞ。

児童：　両国の百姓が泣きながら、戦争が早く終わってほしいと願っていたでしょう。

１５９２年の豊臣秀吉の朝鮮侵略、いわゆる文禄の役・壬辰倭乱を朝鮮・日本の立場からみる発問です。子どもは両国の百姓が被害を受け、資源が無駄になるという認識を示しました。イ・ウンホン先生の民衆の側にたった発問に、同じ思いにたつものとしての共感しました。しかし、子どもの具体性に乏しい抽象的な答えにとまどいを覚えました。抽象的な答えの裏づけとして、民衆のさまざまな具体的な被害、特に韓国では欠落するであろう日本民衆の被害が事前学習３時間の中で学ばれていることを期待しました。

沙也加は朝鮮になぜ帰化したのか

教師：　では、沙也加はどんな人物ですか？はい、Gさん。

G：朝鮮が美しいと思って、壬辰倭乱の時、朝鮮に帰化した人です。

児童：　沙也加は、わが朝鮮の礼儀が好きで、平和を望んでいる人です。

教師：　一つ聞いてみましょう。沙也加は朝鮮の礼儀、朝鮮の文物が好きで帰化したといっていますが、本当にそうなのでしょうか？考えてみましょう。一体沙也加はなぜ帰化したのでしょう？はい、E。

E：戦争に来たとき、朝鮮の美しい女性を見たからです。（爆笑）

教師：　本当にそうかもしれないよ。また、ほかに…。　はい、どうぞ。

児童：　その当時、わが朝鮮の錦繡江山[5]があまりにも美しくて、戦争でそういうのが破壊されるのがいやだったからです。

教師：　沙也加は帰化することによって、日本にいる家族及び財産をすべて失う可能性がある。それにもかかわらず、平和を愛し、朝鮮を尊敬したから帰化したといったが、ほかに、また理由はないでしょうか？はい、どうぞ。

児童：　日本と朝鮮との戦いでかなり疲れていたので、朝鮮でゆっくり暮らそうと思って帰化したでしょう。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　命を大事に思って、部下たちと一緒に帰化したと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　朝鮮を尊敬したからではなく、日本がいやになったからでしょう。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　家族の命を大事にするほど、朝鮮百姓の命も大事に思ったからです。

教師：　はい、以上、いろいろと沙也加の帰化理由について述べてきましたが、実際、本当の帰化理由に関しましては、研究資料が少ないため、残念ながら未だに良く分かっていません。人々の間では、沙也加が平和を愛したからだとか；豊臣秀吉が日本統一の際、沙也加は豊臣秀吉に負けた将軍だからだとか；沙也加は豊臣秀吉とは別の軍の将軍で、実際、朝鮮に来てみたら、特別に戦争する理由がなかったからだとかいろいろと議論されています。

私も沙也加がどうして帰化したのか考えてみました。ビデオや鹿洞書院『金忠善沙也加。友鹿里』によると、沙也加（1571～1642年）は1592年、加藤清正の左先鋒将として3000人の兵士を率いて４月13日釜山上陸し、15日には朝鮮側に投降したと言います。

あまりに早い投降であるといえるで

[5]錦繡江山とは金欄の刺繍を施したように美しい山河ということである。

しょう。事前に投降を決めていたと私は推論します。

投降の理由を金忠善に関する史料『慕夏堂文集』には　日本軍の非道な侵攻を批判し、朝鮮が礼義の国であるから帰化したといいます。

こどもたちは、この『慕夏堂文集』の言をうけて、朝鮮側が礼儀を守る美しい国だったから投降したといいます。

また、朝鮮は『錦繡江山』と呼ぶほど美しいという小学生の認識に感心し、沙也加は美しい山野のある朝鮮の平和を守りたかったのではないかという子どもの思いに私は共感しました。

沙也加の家族はどうなったの

教師：　では、もうちょっと考えて見ましょう。沙也加が帰化したとき、日本の家族はどうなったのでしょう？

（間を置く）

はい、どうぞ。

児童：　皆死んだでしょう。豊臣秀吉が裏切り者の家族として、全員殺したと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　帰化する際、こっそり家族を連れ出したと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　沙也加が帰化したことを知って、誰もいない無人島に行って、こっそり暮らしたと思います。

教師：　いろんな考えが出てきましたが、沙也加に関する資料が少ない分、当然その家族に関する資料も少なく、いろんな可能性が取り上げられます。

沙也加が帰化したとき、日本の家族はどうなったのでしょう？というこの発問は難問です。考えるための直接的な教材は与えられていません。子どもたちの答えに触発されて、次のように憶測しました。

戦争に男系の一族郎党を連れてくることは可能です。事前に予定していた投降ならば、残された一族は逃げ、秀吉に皆殺しされずにすんだ可能性が大です。この時代の武将である22才の沙也加には若妻と幼子を家族にもっていた蓋然性が高く、恋しくと思ったと考えます。

帰化することの困難さ

教師：では、沙也加の帰化と共に、きっと困難も多かったものと考えられますが、どんな困難があったと思いますか？　はい、どうぞ。

児童：　攻めてきた日本人がいやだったから、朝鮮人が沙也加を憎んで、また嫌がったと思います。

はい、どうぞ。

児童：　最初は朝鮮人に嫌われたが、沙也加の平和を愛する行動に朝鮮人が心を打たれて、受け入れたと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　言語の違いで、大変だったかもと思います。

教師：　そう、もし皆さんが今すぐ日本かアメリカのどこかに行くといった場合、コミュニケーションが取れると思いますか？勿論、意思疎通が不可能でしょう。私もできません。　はい、どうぞ。

児童：　生活様式の違いで大変だったと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　日本のスパイだと思って、韓国で受け入れなかったと思います。

「沙也加の帰化と共に、きっと困難も多かったものと考えられますが、どんな困難があったと思いますか？」というこの発問は、前の発問「沙也加が帰化したとき、日本の家族はどうなったのでしょう？」との関連で、沙也加の望郷の念を念頭においていたものとイ・ウンホン先生の指導案から読み取れます。ところがこの発問は多義的に子どもが解釈でき

るため、別の論点を子どもたちは提示します。平和を踏みにじる日本を捨て、礼儀を大切にし、美しい山野をもつ朝鮮を選んだ沙也加を朝鮮民衆は受け入れたかどうかということを子どもたちは問題にしたのです。

イ・ウンホン先生は、この授業の主題設定の中でのべた「子どもたちが現代社会を生きる主体的存在として歴史の問題をみつめるようになったらいい。」という願いに答えるような子どもたちの問題提示といえるでしょう。

成功した沙也加と日本人投降者

教師：　そう、それにもかかわらず、沙也加は韓国でさまざまな業績を築き、王様から金忠善という名を授かって、今でいう長官の位に就きました。では、沙也加みたいに帰化した人はどれぐらいいると思いますか？一人、それとも何人？　はい、どうぞ。

児童：　一万人ぐらいいたと思います。

教師：　そういえば、前回の授業で、先生が一万人ぐらいって言いましたよね。では、その一万人はなぜ帰化しましたか？平和を愛したから？それとも別の理由が？　はい、どうぞ。

児童：　沙也加の朝鮮を愛する気持ちが、みんなに伝わって、みんな帰化したと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　戦争で、飢えと疲れに途方に暮れて帰化したと思います。

教師：　帰化した一万人はどこで何をしていたのでしょう？　はい、どうぞ。

児童：　帰化した人だけ集まって、暮らしたと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　朝鮮の遅れた文化を発展させるために、あちこち離れ離れになったと思います。

教師：　うん、一万人入ったけど、実際残ったのはわずかでしょう。もし、日本にいたなら普通の日本人と同じように、ちゃんと名字を持って生きていけたのに、朝鮮に来たから、族譜もない人生[6]を送ることになりましたね。

イ・ウンホン先生は帰化した人は１万人で、実際に残ったのはわずかと言います。わずかに残った人を帰化と言うのではないでしょうか。１万人は降倭というべきではないのでしょうか。

この問題に関して、北島万次は「壬辰倭乱における降倭の存在形態-その素描」[7]の中で次のように言っています。

降倭とは、「倭軍の中から朝鮮あるいは明側に投降した将兵をいう」と定義しています。北島は降倭の内、沙也加のように「朝鮮側につき戦功をあげたものは優遇され子孫は繁栄するが、戦功をあげないものは誅殺される」と述べ、前者の事例として、沙也加とともに倭軍と戦った沙古汝武（作右衛門）や慶尚道密陽に降倭村を開いた金向義の事例を挙げています。一方鉄砲砲術などの特技がないものは朝鮮水軍に送られ奴隷労働に使役され、女真への防備問題がおこると朝鮮北部へ消耗品として送られたといいます。

沙也加の立場にたって手紙を書く

教師：ところで、日本人と戦う沙也加の心情はどうだったのでしょう？　はい、どうぞ。

児童：　だいぶ辛かったと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　戦争が早く終わってほしかったと思います。

教師：　はい、どうぞ。

児童：　自分の民族を殺すことになるから、不安で、また複雑だったと思います。

教師：　そう、もし、壬辰倭乱が起こらなかったなら、いやな経験をする必要もなく、

---

6 族譜は両班しか持ち得ない特権であったが、朝鮮王朝末売買等によって全民衆に族譜は及んだという。

7 『歴史評論 651 号』2004 年 7 月号

自分の民族を殺さざるを得ない不安や痛みを感じなくて済んだでしょう。では、今から「学習紙」を見てみましょう。①～④[8]のうち、一つ選んで沙也加の立場になってものを書いてみてください。(作文)

発表

C：一日一日が苦痛である。いつまでこんな覚悟で生きていかないといけないの。朝鮮がいいといって帰化したけど、一日一日が不安だ。家族に会いたい。今日の戦いは、知人との戦いだった。恥ずかしかった。朝鮮に帰化したけど、国は忘れられない。家族はどうしているのだろう。朝鮮には、いまだ私を嫌っている人が多いと聞く。悲しい。しかし、今の困難を乗り越えていかないといけない。頑張れ、沙也加！

(ここから教師が通訳するように要請)

児童：国を守るのも大切だと思いますが、平和に生きていくのも大切だと思います。今日本と戦うと朝鮮はきっと戦争になり平和がなくなります。(②をうけて)

児童：沙也加は朝鮮が好きで平和を望んでいます。それで私が沙也加だったら朝鮮に帰化したと思います。日本に住んでいる一族に私は帰化しますと言い、一緒に帰化しましょうと呼びかけます。そして日本の国王である豊臣秀吉に手紙を書いて、朝鮮と平和を結んでくださいと頼みます。手紙を出しても戦争をやめないと私は日本と戦うことになります。そして、戦争が早く終わってほしいと思い続けます。(②をうけて)

児童：私だったら豊臣秀吉の命令に従ったと思います。朝鮮がきれいで好きだといっても自分の国は自分自身が好きだからです。私の国には御先祖様がいて、ご先祖様を祭祀するのが義務だからです。朝鮮の人々に取り囲まれながら生きていくのが大変だと思われるからです。(①をうけて)

児童：私が沙也加だったら悲しいと思います。例え金という姓をもらったとしても家族と別れて朝鮮でくらすことは、苦しく悲しかったと思います。(②をうけて)

教師：　戦争というものが、個人個人にどんな影響を及ぼすか考えて見なさい。

児童１：生命を脅かします。

児童２：戦争は、一個人じゃなくて、子供や家族を失いやすいです。

児童３：国や個人に何の利益もありません。

児童４：お互いに傷つけ、またお互いに憎むようになります。

教師：　今日は沙也加についてみてきましたが、沙也加は壬辰倭乱の時、日本から韓国に帰化した人物です。逆に、壬辰倭乱の時、韓国から日本に帰化した人物もいます。イ・サムピョン[9]という人物です。では、今日の宿題はイ・サムピョンという人について調べてください。はい、終わります。

児童：　起立！教えてくれてありがとうございます。

ある子どもは、先祖の祭祀のために秀吉に従わざるを得ないと言いました。イ・ウンホン先生も族譜のない人生を問題にしました。沙也加は平和で美しい礼儀正しい朝鮮へ同化しました。

同化することなく異文化のまま共生するという選択肢は朝鮮王国という国家にはなかったのでしょうか[10]。

(琉球大学・教育学部)

---

8 ①朝鮮に投降した日と、朝鮮と日本人との戦闘を行った日のこと。
② 沙也加が帰化した後の金忠善になって、日本に置いてきた自分の家族に手紙を。
日本側に配られた「学習紙」には上記二点しか記されていない。

9 有田焼の陶祖　李三平

10 もちろん、この教材に上記のことを求めることはできないが考えることはできる。イ・ウンホン先生がいう現代社会を生きる主体的存在として歴史の問題をみつめるといった時、必要な視点である。在日はもちろん世界中にいる朝鮮人・韓国人の歴史的問題であることは明白である。韓国国内の歴史的問題として考えてみたい。